

此事者始於山槐記。係於藤原忠親之所錄。忠親不明於道理。信浮說而記之耳。後世執史筆者。相因而無疑。使忠孝若重盛者比於匹夫匹婦之所爲。可勝慨哉。

### 山中花見の記

助教授 黒本 稼堂

時は卯月の十九日ありけり。天遊道人訪ひきて、今より花見にねもひたち給はぬか、とさうはれければ、いづこの花をか、と問ふ。道人はよゑみて、いはぬぞ興あるべき、と答へられぬ。いふかしく思ふものから、午の後五時ころに、宿を出づ。

袖はへていつこともあくゆくさきはたはつらあくもゆかしかりけり  
とよみ出ければ道人かへし

ゆかしくもあらねときませ世にまらぬ花を尋ぬるけふの山ふみ

向山といふを躓れば、いづれのかたも、花ざうりにて、城下乃家は、皆白雲にうづもれぬ。

むかひ山のほりてみまはいくへとも限えられぬ花のまら雲

この比のけしきは、いづれとは、あけれど、人の住める境は、人馬の塵、心にろみぬべく、目に見ゆる者は、僅に、一かこひの花のみあり。さるを、あゝに、くれば、物の音とては、鳥の聲、塵とては、花のちり、外にこの世に似るものもあし。殊に、南の山、西の海、千里の外も、よろあらず、よきは、よく、あしきは、あしく、みゆるぞかし。とまれ、かくまれ、世の外に、たつべきに、ころ、といひつゝ、ゆく。茶店のゐるじ、まばし、休らひ給へとて、あとに従ひ

つゝ、こゝろして、さして、をしふ。足をとゞめんとての、下心あるべし。時に、雉子の一聲  
音づるゝ、さこゆ。いにしへの人のいひけんやうに、山更に幽かあるこゝちぞしける。  
心ちく山こえくれは片岡にうれとまらせてきゝすちあり

山の東の方に、切通しあり。これを横にみてゆく。蓮の湖はるかにみゆ。ゆきくゝてつ  
いらをりの路を、たどりけるに、よものけしき、いよゝ物さひし。されど、谷間をみれば、  
棚田いくきたともなく、つらちりて、蛙蛙ちく。

櫻さく片山里の田井にちくかはつの聲に春のゆくこゆ

猶ゆきくゝて、一の丘にのぼる。東も、西も、千尋の溪にて、底に菜の花など、咲きけり。高  
き山らのさとひ歌、思出られて、ひたすら、泰平の御代、仰がるゝあり。丘の上、まの笹  
ちど、茂りて、馬のたてがみ、ふみわくるこゝちす。東北の方を詠むれば、越のたち山、栗  
から峠を隔てゝ、遙に雲井の空にうびえ、蓮の湖も、今は、まのあたり、波のよる、みゆ。  
西の方に、首を回らせば、例の切通のうらをゆくちありけり。ゆきてかへるやうなり。こ  
の間を、長峯となんいふ、とぞ。弓手に回り、馬手に轉うつり、あるは、昇り、あるは、降くだるゝはと  
に、かうやうの直ぐなる峠を、うちつゝけたる、うちみるさへ、氣のふるぞかし。たのれ、  
これにて、文の養局といふことをさとりつ。溪をみるに、一本一本の花、さかりにさきけり。  
道人ゆびさして、これも、例の花なりといはれたれば、よめる、

人まれすいく代のはるをすこしけむ片山かけの花のひともど

峰も、半すぎゆく程に、一人の柴かつぎさる乙女に遇ふ。酒屋の道は、これありや、と道

人のどはるゝに、さなりとて、すぎゆく。酒屋とは村の名にもや、とさらよいふかしがりけり。二三町ゆけば、ひとりわらはの岸にはらばひて、あるふ見ゆ。かの松下の童子に似たり。問ふべきよし、あきよしも、あらざれど、程遠ければ、よしなし。只けふみむ花よ、近かるべきとて、いそぎて丘を下るれば、あばらある家、坂の玄たにたてり。道人の歌。

白雲のかゝれる山もわきいれはすゝ花さく庵はありけり

こゝより遙にあなたをみやるに、谷間をかけて、櫻桃、いく十株といふ數をえらす、今をさかりに。さきにはふ。高きは、雲にかくろひ、卑きは、夕日にまがひて、みゆる中に、數戸の村あり。うづもるゝばろりなり。ほどく、唐土の桃源も、かくや、とぞ思ひやらるる。

木の間より色もかすみて見えわたるこの世の外の花の夕はぬ

道人いざけふの花見は、こゝにころ、といひて、からくゝとわらふ。やがて、その村にいたりて。酒もどめつゝ、あやしき山の菜を肴として、よゝと飲みける程に、日もくをわひの鐘ひゞきて、花のふゞきも、寒からず、一入酔もすゝめり。

狩くらしうれきは後の思出に花のふすまやかりてねあまし  
道人もふけりて、よまれたる、

我かものゝこゝちらすなる年々にかれてとひくる花の一村

村にすむものゝ、ひるの疲をいやさむとてや、とくりやうの物を携へて、くる童はれ

ば、一合ばかりうひて、舌うちして、飲む翁もあり。そのうちに、七十四才なりといふ翁のいと神さびたる、一人きぬ。たのれ一たひせさせは、頭よたしいたいきて、やがて、かへして、ひれふす。その状さま今の世の人あらす。養老といふ酒あり。老を養ひし古への瀧の水あらで、さく花の、玄づくをよめるものとかや。これも、おの世の物あらぬこゝちすれば、いで、たのが親にも、とて、一樽もどむ。その家のほるじの出しけるを、試みつるに、そのかぐはしさ、いふ所にそむらす。うも、この所、いとある所にうとみれど、村の玄るしもみえず、道人に問へど、わらひて、答へず、その心、たのづから開なるさま、またるもをかし。なべて、風流の人は、風流の處をえるは、さることあるめれど、人境をへたつる程、遠からぬ所にも、かゝる仙郷のあるものか、と猶わたくゆかしく、おもはゆる程に、谷の肩も、閉ちて、花の色も、見えずありぬ。

## 拜聖庵の花、観ずの記

村川堅固

三月二十五日は、日曜にあたりて、天氣もいと長閑ありければ、拜聖庵の花、きのふけふを盛にて、咲き残れる梢もなく、春雨の一さきり、降りたらんには、夜の間にも、見ばへなくなりぬべし、さぞ聞きて、みにゆくひとのいと多かる。あるは瓢提げ、はた籠かごもたせて、今日ばかりは、昔にかへりたらん、こゝちやしけむ。若き様して、行く翁もあり。あるは、春風よ、輕袖をひるがへし、のとくと、あゆみ行く乙女もあり。武官と見ゆるは、馬馳せて行き、文官と見ゆるは、妻子を携へてゆくあり。去年の花は、學校の考試

の人々何れも例  
しれものさなり  
くなるべし後段  
伏筆